〜〜〜

日本ギャスケル協会

第 34 回大会

2022 年 10 月 1 日（土）13 時より 於：日本赤十字看護大学（広尾キャンパス）205 教室
（オンラインで中継予定）
〒150-0012 東京都渋谷区広尾 4-1-3

〜〜〜

13:00〜13:05 開会の辞　日本ギャスケル協会会長　大野 龍浩（立正大学教授）

総合司会　矢嶋 瑠莉（千葉工業大学非常勤講師）

13:05〜13:35 研究発表１　司会　松浦 愛子（釧路公立大学准教授）

'"China's Earth and Indian Leaf": Oriental Commodities in Elizabeth Gaskell's Condition-of-England Novels'

中越 亜理紗（東京大学大学院博士課程）

13：35〜14:05 研究発表２　司会　矢野 奈々（北里大学専任講師）

「ギャスケルとジョージ・エリオットが描いた disability」

星　志乃（早稲田大学大学院博士課程）

14:05〜14:10　Break

14:10〜14:40　研究発表３　司会　矢次 綾（松山大学教授）

「「リジー・リー」における〈堕ちた女〉の表象と産褥期精神病」

早川 友里子（大妻女子大学専任講師）

14:40〜14:50　Break

14:50〜15:20　総 会

15:20〜15:25　Break

15：25〜16:25　講演１　司会　木村　晶子（早稲田大学教授）

「エリザベス・ギャスケルと煽情小説」

松本 三枝子（愛知県立大学名誉教授）

16:25〜16:35　Break

16:35〜17:35　講演２　司会　金山　亮太（立命館大学教授）

「イギリスと日本の社会小説雑感」

石塚 裕子（神戸大学名誉教授）

17：35〜17:40 閉会の辞　日本ギャスケル協会副会長　閑田 朋子（日本大学教授）

本大会に関する問い合わせ：日本ギャスケル協会事務局
〒422-8545　静岡県静岡市池田 1769　静岡英和学院大学短期大学部　芦澤久江研究室
E-mail:ashizawa@shizuoka-eiwa.ac.jp

梗概

研究発表

1. ‘ “China's Earth and Indian Leaf”: Oriental Commodities in Elizabeth Gaskell’s Condition-of-England Novels’

中越 亜理紗 （東京大学大学院博士課程）

In the Victorian era, while women were rarely direct actors in British imperialism, the consumption of foreign commodities increased indirect interactions between women and overseas territories. Elizabeth Gaskell, notwithstanding her feigned ignorance regarding supposedly 'unfeminine' issues of global trade, had cultivated an acute responsiveness to the world beyond England. This presentation investigates how Gaskell deploys oriental commodities like tea, opium, silks, and shawls, as portrayed in her novels, namely *Mary Barton* (1848), *Ruth* (1853) and *North and South* (1854). In these texts, hybrid cultural characteristics of the commodities are utilised to either domesticate or orientalise the items or the user in question. I argue that whether they are problematised or not seems to depend on the social status of the characters in relation to them. Moreover, I aim to unpack how some female characters are highlighted with oriental physical features and described metaphorically as a 'slave' or an 'empress', and what that seems to signify in the Victorian marriage market. I wish to argue that Gaskell's novels can be thus illuminatingly situated within the broader context of the British empire, which both qualifies and enlarges their close attention to domestic issues of class and gender, and to the mid-nineteenth-century debate on the condition of England.

２.「ギャスケルとジョージ・エリオットが描いた disability」

星　志乃（早稲田大学大学院博士課程）

ヴィクトリア朝では、産業革命後の様々な社会変化により身体障がい者が増えたと言われている。1982 年にアメリカで創始された Disability Studies（障害学）の文学研究への応用が、2000 年代から特に盛んになっており、ギャスケル文学における身体がい者・知的障がい者への注目度も高まってきている。また、同時代のリアリズム作家であるジョージ・エリオットの作品にも、複数の身体障がい者が描かれている。そこで本発表では、ギャスケルとエリオットの小説における中産階級の男性身体障害がい者に焦点を当て、彼らの作品内での影響力や、障がいを持たない人物との関わりを考察する。分析対象は *Ruth* (1853)の Thurstan Benson、*Adam Bede* (1859)の Bartle Massey、*The Mill on the Floss* (1860)の Philip Wakem の３人である。ギャスケルとエリオットが描いた身体障がい者の比較を通じて、*Ruth* における Mr Benson の役割の重要性やギャスケルの障がい者表象の特徴を明らかにする。

3.「「リジー・リー」における〈堕ちた女〉の表象と産褥期精神病」

早川 友里子（大妻女子大学専任講師）

ギャスケルの作品にはしばしば子どもの死に伴う母親の深い絶望が描かれる。ギャスケル自身も第 1 子の死産や生後 9 か月の息子の病死など、産後間もない頃に子どもを失い、心身ともに衰弱した経験をもつ。

「リジー・リー」（“Lizzie Leigh”, 1850）は、道を踏み外してしまった〈堕ちた女〉（Fallen woman）の行く末を描いた作品として知られているが、子どもの死を嘆き悲しむリジーの姿は、社会悪として排斥されるべき不道徳かつ性的に堕落した売春婦ではなく、産後様々な要因によって精神を病んだ女性たちを彷彿とさせる。

本発表では、19 世紀ヴィクトリア朝において妊娠や分娩を経験した多くの女性が患ったとされる産褥期精神病（puerperal insanity）がどのように捉えられていたのかを概観した上で、「リジー・リー」における主人公リジーの表象について考察する。そして、ギャスケルが女性特有の精神疾患であるとされた病気とリジー・リーを関連づけることで、その人間性の回復を模索した可能性について考えていきたい。

講演

１.「エリザベス・ギャスケルと煽情小説」

松本 三枝子（愛知県立大学名誉教授）

イギリスの 1860 年代は、煽情小説の時代といってもよいだろう。それは、Wilkie Collins の *The Woman in White*（1860）に始まり、Mary Elizabeth Braddon の *Lady Audley's Secret*（1862）により完成したジャンルである。これから考察していく Elizabeth Gaskell の *Wives and Daughters* は正にそのような時代に書かれ、読まれたのである。何よりもこの小説が連載された *The Cornhill Magazine* には、同時期にコリンズの *Armadale* が連載されていた。この雑誌の読者たちは、時代の流行作家であるコリンズの最新作と、社会小説や家庭小説の作家として定評があったギャスケルの最新作を、同時に読み比べるという楽しみを、享受したのである。

ブラッドンが書いた煽情小説を念頭に置きながら、『妻たちと娘たち』では、どのように sensationalism を扱っているのか、あるいは扱っていないのか、考えてみたい。残念ながら、『妻たちと娘たち』が最後の作品となってしまったギャスケルが、この人気のジャンルを意識しながら書くことは、この後にはないのだが、同時代の作家や批評家は、煽情小説を批判しながらも、決して軽視することができなかったことも事実である。

煽情小説では、重婚、放火、殺人、暴力など、家庭小説では回避されたテーマを、積極的に扱っている。副題が、“an every-day story”となっている『妻たちと娘たち』では、日常の物語の中で、どのように非日常が語られているのか、どのように時代のトレンドは扱われているのか、考察を深めたい。

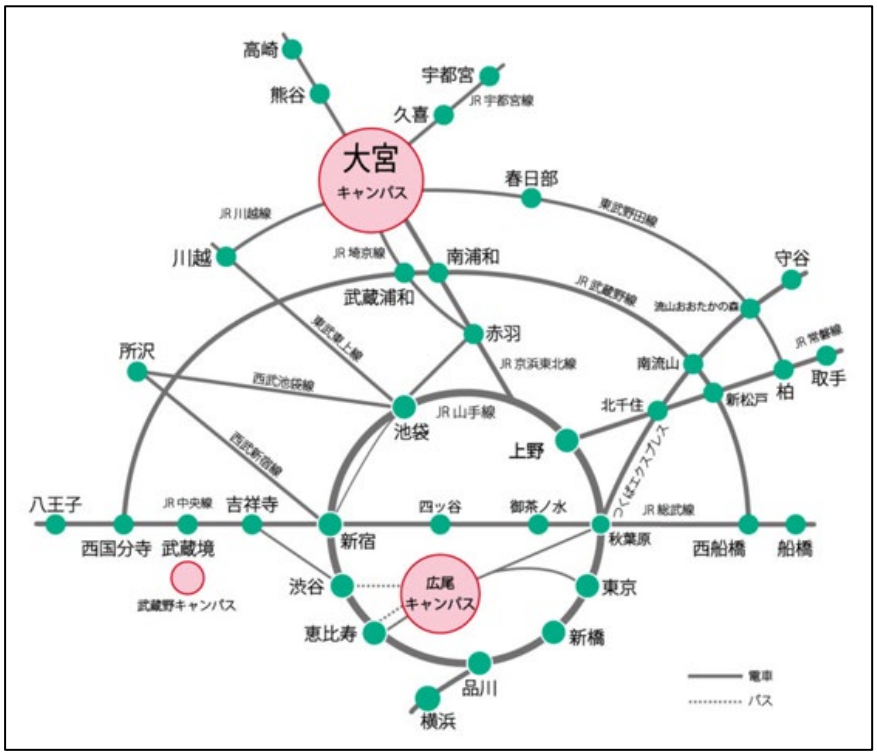
２.「イギリスと日本の社会小説雑感」

石塚 裕子（神戸大学名誉教授）

イギリスでは 19 世紀の未熟な資本主義のもとに生じた社会問題、長時間労働や児童・女性の低賃金での搾取など労使問題を社会小説と称するが、日本では時代はずれるものの、プロレタリア小説と呼んでいるようだ。その理由はおそらく日本では『蟹工船』（1929）の小林多喜二など、告発した作家が自ら体を張って労働者になるからであり、ギャスケルやディケンズは小説作品で歪みを告発しても、自らは中産階級にとどまり、労働者となって雇い主に立ち向かうということはない。ちなみに『ああ、野麦峠』（1968）は明治から大正の悲惨な労働搾取を受けた女工への聞き取りを元に山本茂実がまとめたルポルタージュであり、社会問題のおきた同時代の小説ではなく、いわば民衆史に分類されるであろう。日英両国のそのあたりの事情や、働く人間のほぼ半数が非正規雇用という現状から現代日本の社会問題小説も考えてみたい。

アクセスマップ

大会会場は広尾キャンパスです。



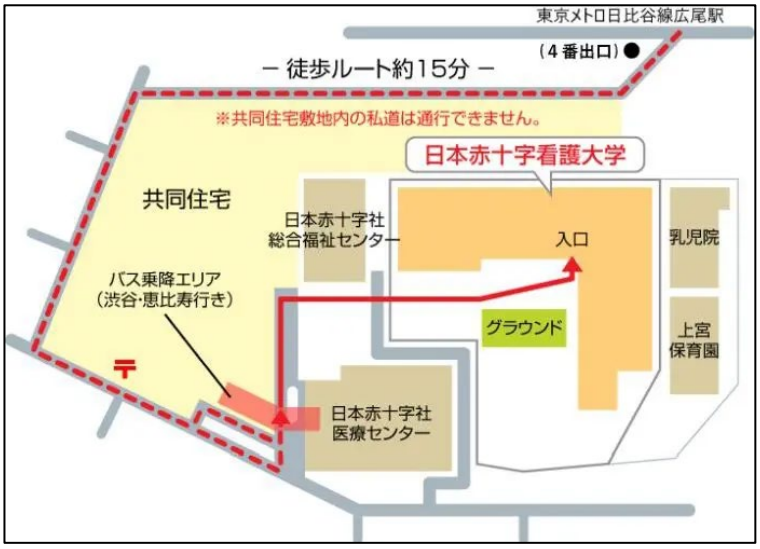
渋谷・恵比寿駅からバスをご利用の場合

● 渋谷駅東口から（JR・東急・京王・東京メトロ）
　都営バス「学 03」系統 日赤医療センター行 終点下車 （約 15 分 ）

● 恵比寿駅西口から（JR・東京メトロ）
　都営バス「学 06」系統 日赤医療センター行 終点下車 （約 10 分 ）

● 表参道駅から港区コミュニティバス「ちぃばす」
　港区コミュニティバス「ちぃばす」の青山ルートに、「日赤医療センター」バス停が設置されています。時刻表、運賃などの詳しい情報は港区のホームページでご確認ください。

地下鉄広尾駅から徒歩で来学の場合

東京メトロ日比谷線　広尾駅から下記の徒歩ルート（約 15 分）にてお越しください。

※共同住宅敷地内は私道のため通行できません。